

Lessons Learned 私が学んだこと

Getting evaluated 発達評価を受ける。

When? Don't wait and see いつ受ける？ 経過観察はやめましょう

もしも、お子さんに関して、何か違う、と感じるところがあれば、今すぐ、チェックしましょう。3歳までに3単語の文章を話さない、とか、お子さんの同級生とくらべて不器用さを感じるなどがあれば、お子さんの発達評価の必要性はわかりやすいでしょう。しかしながら、幼少期において学習障害は社会性として現れることもあります。たとえば、公園は人が多すぎて行きたくない、とか、お誕生会が大嫌いだったりいろんな状況でパニックをおこしてしまったり、幼稚園・保育園では決まった行動を取りたがり必ず同じいすに腰掛けようとしたり、など。もしこのようなことが思い当たったら、のんびり構えるのはやめましょう。発達評価を受けるチャンスです。母親は子供が定型的な発達曲線に乗っているのかどうかを知る、直感を持っています。何かを殊に避けるような行動（例えば文字を見ようとしなない、など）は気づかれていない学習障害（LD）のサインの可能性があります。お子さんを発達評価することに関し、マイナス面は全くありません。経過観察を続けていて、その結果お子さんが学校を嫌うようになってからでは遅いのです。

Who should do it? 誰が評価をするのか？

お子さんは熟練した、学習障害を専門とした神経心理学者、または臨床心理学者に評価を受けるべきです。お子さんをテストし、その結果がよいものでなかった場合、テスト者に対して嫌悪や不信感を感じるかもしれません。ですが、少なくとも、彼らの専門的知識については信頼して良いでしょう。全く別の原因によって起きた読みの問題が、表面的には全く同じ現象として現れている可能性があります。文字を学習していない子供たちですから、失読症ではないのです。根底にある、各人の情報処理プロセスの中の問題点を理解したうえで支援プログラムを立てなければいけません。適切な発達評価によってお子さんの持つ問題を明らかにすることが出来ます。お子さん向けの学習方法、最適な支援プログラムを提供することが出来ます。例えば、視覚的な、または動的な活動を伴うと記憶の定着が図りやすい、などが分かります。

Getting help 支援を受ける

何もしないでおこう、という自分の内なる言葉に耳を傾けてはいけません。

子供に問題があることを望む親などいません。つらいことです。ですから、これはなかったことだ、と思いたくなるのは自然なことです。たとえば、以下のように考えてしまうのです。

- ・ ちょっと様子を見よう。学校も、2年生まで待ってみましょう、といているし。
- ・ うちの子供は本なんか好きじゃないのよ。スポーツが好きなの。
- ・ 支援を受けるなんて、うちの子は自分が周りとう違う、とってしまうわ。
- ・ 何とかしなきゃ、なんていう衝動に負けちゃいけないわ。

Intervene early できるだけ早く行動を起こしましょう

これまでの研究の結果は明快です。早ければ早いほど、好結果を得られます。理想的には4-7歳の間支援プログラムを開始するのが良いです。LDの発達評価が遅くなった場合、その子供が成長してからの認識発達および言語発達の遅れ、という結果を引き起こします。早期診断はその子の認識力と学習能力の限界を押し広げることになります。10歳は大きな節目であるといわれています。空間認識、点字や地図を読むなどの能力に顕著な変化が現れる年齢だからです。

第2に、勉強することで子供が自分自身を馬鹿だ、と感じてしまうなら、その子供は決して勉強など続けないでしょう。親であるあなたが様子見に時間をかければかけるほど、お子さんは勉強を嫌うようになります。お子さんにとっては早期から支援を受けるほうがよほど恥ずかしさを感じずに済みます。

第3に、お子さんは、自分自身が“何か変だ”と感じています。それが何であるのか、は表現できなくても。お子さんは、読字の問題よりもはるかに深刻な問題を自分が持っていると思われ、恐れています。お子さんに支援の手を差し伸べましょう。誤った保護の手ではなく。私は我が子・デビットが、早い時期から自分の困難に気づき、文字を読めないという事実で大変悩み思いつめていた、ということ想像もしていませんでした。彼のあらゆることに対して否定的な態度は、自分が他と違う、という認識から来るつらさを包み隠すためにありました。“怠け者”や“無関心”と周囲に思われていた行動は、実は皆と同じように学びたい、という切実なかつかなわぬ望みをごまかすためにありました。あなたのお子さんは話をしたりしましたか？歩きたがりでしたか？同じように、お子さんは読んだり書いたり、学びたいのです。

Don't tutor your child yourself お子さんをご自分で指導するのはやめましょう

仮にあなたが指導法をご存知でも、です。チューター（指導者）は変更できますが、親は変更できません。お子さんが“私は分かっていない”ということ親の不安そうな目の中から認識したら、お子さんはさらに読むことを拒否するようになります。

Choose a tutor with specific training in reading remediation

読字の支援に関して特別な訓練を受けた指導者（チューター）を選びましょう

読字に関するチューターは、家庭教師でもなく、お子さんの学校での到達度評価をする学校教師でもありません。ディスレクシア（dyslexia: 読み障害、読み書き障害、読字障害、難読症）の子供は、別のやり方で指導を受ける必要があります。複数の知覚機能を用いた支援を行うのです。そのプログラムは各人にあった形で作られます。オートン・ギリングハム法、またはリダムード・ベル法と呼ばれるものなどに基づいて構築されるものが良いでしょう。あなたは車の故障を営業マンに修理など頼まず、修理工に依頼するでしょう。お子さんは、同様に、専門家の支援を受けるべきなのです。

A tutor must understand the dynamic context of learning

チューターは学習の動的なプロセス全容を理解しなければなりません

通常、子供にとって大人と同じようなことが出来るということは大変な喜びとなります。例えば、野球でボールをキャッチするとか、自転車に乗れるようになる、とか。しかしながら、ディスレクシアの子供にとって、解読する能力を身に付けるのはつらい作業です。努力に伴う不安感を避けようとするかもしれません。チューターは、その子が隠しておきたい弱点を隠さずに済むように手を差し伸べましょう。セラピストのように、子供が学習拒否することに対応し、子供の学習の足場となり、学習を支援し、情報を提供しなければなりません。支援の初期で、まだ何も達成感の無いときには、子供の“やってみたい”という気持ちは、指導者への愛着、受け入れられている、という感覚、そして安心感によってもたらされます。

Choose a tutor you trust 保護者が信頼できるチューターを選びましょう

良いチューターとは、子供の人生の一部、保護者であるあなたの人生の一部となります。出来ないことに向き合うのはつらいことです。もしもお子さんが、親であるあなたがチューターを信頼していない、と感じたら、お子さんは難しく、つらい学習作業をしない理由として、親の不信感がある、という形で利用します。あなたとチューターは共同して、子供に本当に努力してほしいと願っているのだ、ということを実感しなければなりません。

What you can do 親であるあなたに何ができるのか

Trust your child 's passions お子さんのやる気を信じましょう

子供たちを信頼しましょう。これが、もっとも大事なことです。デビットの読みたくない、という行動が、自分自身の困難をごまかすためにあった、ということは、私にとって驚きでした。遊

ぶことが、読めない、というトラウマの克服の手助けになりました。彼の意欲を尊重することで、かれは不安を乗り越えるエネルギーを得ました。恐竜に関して勉強することが、文字や音を結びつける手助けとなりました。地図への興味が書くことを、**G.I Joes**（テレビ漫画番組）で名前と時間の流れを覚えました。デビットは知識の吸収に大変な意欲がありました。が、学校で教わる形では知識の取入れが出来なかったのです。

Let them play 子供を遊ばせましょう

遊びは学習過程において強力な役割をはたします。すべての子供にとって、遊びによって世界は身近なものとなり、経験が自分のものとなります。不安感は少しずつ薄れていきます。デビットにとってはゲームをすることで自分に力を感じることができました。**Joes** のキャラクターと自分を重ね合わせることで、想像力の中で自分の読字障害の限界を乗り越えることが出来ました。遊びは楽しいですから、子供は何度も何度も繰り返して新しい知識を自分のものにしてしまいます。その繰り返しによって同じようなことに対しておのずと対処が可能となり、不安感が減り、更なる知識の獲得にエネルギーが沸きます。認識障害のある子供にとって、遊ぶことで劣等感を持たずに知識の吸収ができます。遊びとは子供の意欲が発揮される行為であり、この意欲によって子供は読むことが好きになり、文字の読み取りという狭い意味ではなく、子供の精神的な世界を豊かにします。

Don't just talk to your child 子供にただ話しかけるだけ、はやめましょう

子供の視線に立って、子供たちと一緒に遊ばせましょう。お子さんがディスレクシアであってもなくても。指導なんてことは考えずに。子供にとって遊びは言語です。もしもあなたが遊びをうまく利用できるようになれば、あなたは重要な決定をどう下すべきかがわかるようになります。そうしたら、お子さんに話をしてください。私がデビッドと書く練習を始めたとき、私は彼が自分自身のもつ困難に関して大変多弁だと思いました。私が発達評価のために子供に直接話をするようになったとき、多くの子供たちがおしなべて自分の出来ないことに関していろいろと語ることに驚きました。多分、私たち親は、どちらかと言うと子供たちの口を封じてしまっているのではないかと思います。口に出せる問題はさして深刻ではないのだ、ということはセラピーの公理です。

Read to your child while he looks at the words

お子さんが文字を見ているときに読み上げてあげましょう

お子さんに読み聞かせをしてあげましょう。お子さんに読ませてあなたに聞かせるのではなく。お子さんは、できるときが来たら、そうしてくれます。お子さんに読み聞かせるのは2つの点から重要です。まず第一に、お子さんは、読む、ということと安心、信頼と結びつけて感じるよう

になります。第二に、自分に読み聞かされる音を聞くことで、下地のようなものが出来ます。言葉、形、音にあらかじめ触れていることで、後々その文字を見たときにその言葉を認識できる可能性が高まります。

Become a learning partner, not a tutor

学習のパートナーとなりましょう、指導者になるのではなく

お子さんの読んでいる本をあなたも読んでみましょう。お子さんが文字を知るために、ビデオ本なども使ってみましょう。学習障害のあるお子さんは、文字を覚えることの困難さのために、本の世界の中に入って行くのが難しいことが多いのです。もし本に向かうのが難しいようならば、子供たちは本を置いてしまいます。本のあらすじ、登場する事物の名前のリスト、またはビデオを見ることは後にその本を読む助けになります。

Provide a predictable, stable environment with a lot of repetition

何度も繰り返されて子供にとって先が予想できる、安心できる環境を作りましょう

ディスレクシアの子供にとって、感情や興奮を言葉でコントロールするのは難しいため、初めて出会う状況に戸惑っていることがあります。慣れは大事なことです。繰り返しによって、その状況に親近感や安心感を持つことができます。必要な情報を取り出す助けにもなります。情報は多岐に渡るため、何が普通なのかを理解するのは難しいのです。音声認識においても、親が自分に望むことを理解する場合においても、同様です。

Get support 支援を受けましょう

LD児の母親のサポートグループに入る、セラピーを受ける、あなたのお母様に電話をかけてよもやま話す、など、あなたの孤独感が少しでも軽くなることをしてみましょう。究極には、あなたご自身がサポートを受けることがお子さんを助けることになるかもしれません。なぜなら、子供は親を補助自我（auxiliary ego; 分身的役割）として動くことを期待しているからです。発達障害の診断は両親にとっても子供にとってもトラウマになります。なぜなら、障害のある子供を持つ、ということは親としての成長過程初期において、暗い片隅に追いやられていることだからです。もしもお子さんの障害を隠したいという気持ちがあるなら、考えを少し推し進めてみることで、セラピーを受けることで、お子さんの障害について嘆き悲しむ時間を短くすることが出来、お子さんに必要なことをしてあげる心の準備が整うかもしれません。子供のために戦う前に、子供の障害に対する否定を乗り越え、パーフェクトな子供、という幻想を捨てることで、ありのままの子供を受け入れ、子供を困難から救い出すことができるようになります。

お子さん自身も、セラピーを受けることで自身の学習困難を心のカプセルにしまいこむ必要があ

るかもしれません。より大きな自己評価にその挫折感が広がることのないようにするためです。また、自身の学習困難に対する怒りから、他の社会的な困難さ、問題を引き起こすことがあるためです。

Advocate shamelessly for your child

お子さんの代弁者になりましょう

あなたご自身の問題を整理し、お子さんの支援を始めたら、お子さんのために戦いましょう。親であるあなたほど、あなたのお子さんのことを考えてあげられる人はいません。あなたご自身が問題に関して知識を持たなければなりません。が、もしお子さんのためにご自身で戦うのがむずかしかければ、プロに頼みましょう。学校がお子さんの学習に必要なものを提供する、ということを実行にしましょう。もし在籍する学校から必要なものが提供されないなら、特別支援をうけられる学校に通うなどの権利があります。

Life lessons 人生で学ぶこと

You can't control everything すべてを思い通りに動かすことは出来ません

時には、子供たち自身で努力しなければなりません。手を貸すタイミングを知るのはなかなか難しいことですが、子供に代わって何かをしてしまうと、却って子供たちは無力感を感じる結果になることもあるのです。学校で習うことと他の分野を結びつけることで、不安感を減らすようにしてあげ、子供が新しい経験を身に付けられるように導くようにするのが良いと思います。

Anger is inevitable 怒りはつきものです

お子さんにとっても、あなた自身にとっても、学習障害と向き合うのは困難なことですが、いったん向き合ってしまうと結構、上手くいくかもしれません。私は自分が怒らない人間だったら、どんなにデビッドは成長しやすいだろう、と思っていました。意外にも、私自身の怒りを認めることによって、デビッドが、彼自身の怒りや嫉妬を隠さなくても良いのだ、ということを理解するようになったのです。怒ることに対して罪悪感を持たなくて良かったのです。聖人になろうとする必要がなくなり、私たちは怒りと落胆にくれたある夜以来、どうやって怒りを静めるかを学びました。私たちは関係が壊れたとき、それを修復し、怒りは愛情を破壊することはないし、愛情が怒りを抑えるということを学びました。これは、完璧からは程遠いものの、“まずまず”のできてした。

Keep your eyes on the prize 最も大切な目標をみつめて

読む、ということは人生の営みの中でほんの一部でしかありません。読むことに関する一冊の本を書いたあとにこんなことを言うのはおかしなことですよ。しかしながら、学校生活に関する決断は、友達をつくり、自尊心を養い、そして何がき努力することによって、自我の確立をするというお子さんの一生の大きな流れを考慮した上で下さなくてはなりません。子供に読むことを教えることが、私たちのやるべきことだと思っていました。しかし、心から笑えることを学んだことこそが私たちの真の勝利となったのです。

Embrace your limits あなたの限界を認めましょう

これによって、新しい可能性が開けてきます。デビッドがディスレクシアでよかった、と思ったことはありません。それによってデビッドの人間性が良くなったということはないし、私を良い母に育てた、ということもありません。しかしながら、私たちが違うものにしました。予想していなかった形で成長せざるを得なかった、ということです。彼のもつ困難さが、私と私の息子の間に深い信頼関係を構築する機会を与えてくれました。これが無かったらありえないくらいに。矛盾しているようですが、学習障害を持つことによって、デビッドは物事をしなやかに受け止めるようになっていました。自分自身を大変良く観察していました。自分の心がどのように動くのかを鋭く理解していました。ディスレクシアの子供の言語は“鞘が無い seamless”なので、意識と、通常は認識されない心の動きの間にはあまり壁が無いのです。自分の心の動きに大変敏感になりそれが文字となって現れていったのと同様に、彼は自分の認識と精神的な機能を良く知っていました。これらの優れた力は識字障害とはまったく別に機能していました。また、デビッドは文章を書くのが大変上手です。視覚資料と絵画的形象の助けにより、彼の言葉は私には無い率直さを持つようになりました。